

## 俳句の哲学は世界共通

(国際俳句交流協会第26回定期総会でのスピーチ)

ヘルマン・ファン・ロンパイ (前EU大統領)

2015年6月1日・駐日EU代表部(東京)にて

国際俳句交流協会設立26周年おめでとうございます。まず申し上げたいことは、貴協会、とりわけパリ在住の青野洋子さん、事務局の藤本はなさんのご尽力がなければ、本日私は皆様の前でお話しをする機会を持つことはできなかったということでもあります。ご招待いただき深く感謝いたします。

私の俳句とのランデブーが始まったのは2004年、ほぼ10年前のことですので、私の俳句年齢はまだまだ「青二才」であります。

本日「俳句と欧州」という課題についてお話しを進める前に、私が俳句の虜<sup>とりこ</sup>になった理由、そして、政治家でありながら、なぜ俳句の世界に踏みとどまってきたのかご説明をしたいと思います。逆説的に聞こえるかもしれませんが、そもそも私たちの人生そのものがつじつまの合わない「パラドックス」に充ち満ちています。もし合理的な説明に窮したらだれしも、「それは摩訶不思議だ」と言って、逆説を唱えますよね。

俳句に代表される詩の世界と、政治とのつながりはどこにあるのでしょうか？ 言い換えると、詩人は政治家と密接な関係を持つべきでしょうか？ その逆はどうでしょうか？ 一人で同時に、詩人と政治家を兼ねることはあり得ます。なぜなら、人はあることに熱中しているからといって、ほかのことを忘れてしまうことはあり得ないからです。人間一人ひとりの個性は異なりますが、個性には複数の側面があります。そして異なる個性たちは、それぞれが表に出たがり屋です。私は、これらの個性たちが一人の人間の中で「区分されて存在する」(“compartmentalized”)と定義づけています。「詩」と「政治」はまったく別物です。区分すべきです。しかしながら、「詩人」と「政治家」はなぜか共生できるのです。俳人が政治活動をするのは突拍子もない

ことだとは言えません。無駄の骨頂でもありません。俳人は、バランス感覚をもって政治活動と取り組めばいいのです。簡単明瞭 (simplicity) と調和 (harmony) を求める一方、自分が大自然の一部であるという謙虚さを失わないで…。

当然のことながら、有能な政治家は詩人たるべしとか、詩を愛すべしと言わんとしているわけではありません。むしろ、詩人は政治に手を染めない方がいいのかもしれませんが。私はその意味で「政治家俳人」(‘politician-haiku poet’) と自称しています。「俳人政治家」(‘haiku poet-politician’) ではないと断言します。

ところで、政治家俳人は私だけではありません。うれしくも驚いたことに、だいぶ前のことですが、ある人がハマーショルド氏の俳句を集めた小冊子を私に送ってきました。その俳句集は、氏の日記形式の回想録『道しるべ』(英文名: Markings) に挿入されていた俳句だけを編纂したものでした。この「回想録」自体は50年ほど前に読んだことがあります。当時の私としては、俳句の部分に関心を持つよしがありませんでした。偉大なる故ダグ・ハマーショルド元国連事務総長は、手慰みに俳句を始めたのではなく、政治活動上のニーズがあったようです。そうだとすれば、私もハマーショルド氏の同類項ということになります。

先ほど申しあげましたように、われわれ人間はすべて複雑な個性の持ち主ですが、俳句は私の性格に合っています。私は自然や季節が好きです——科学者や環境学者だからではなく、私は「美の愛好家」だからです。人間の精神的な面を重視するタイプだからです。私は簡潔さも好きです——短い言葉で明快に自己表現をすることが好きです。それは私を育んだラテン語の伝統に通じるものです。おまけに逆説も好きです——意表を突いた、一見矛盾した見方で物事を捉える逆説的な表現が好きです。詩の世界がまさにそうであります。

そんなわけで、俳句は私にピッタリなのです。俳句を愛して止まない理由はほかにもあります。文明の進化に伴って複雑化し、懐疑心が横行する現代社会における「簡潔さ」(simplicity)。競争、敵愾心、

嫉妬心が渦巻くこの地球上で最も重要な「調和」(harmony)。俳句を愛する詩人たちには、この2つの要素が備わっています。素晴らしい人生を謳歌しています。俳句愛好者は、常に自然の営みに感動しています。感受性豊かな人生。自己を抑え、周りの人々をたてるゆかしさ。

人と人との国際的な交わりが広がるにつれて、争いのない世界、つまらない意地の張り合いや嫉妬心のない世界の出現を願って、「至上の楽園」(Paradise)を探し求める傾向が高まってきます。「平和」(peace)と「和解」(reconciliation)、「統合」(unity)と「団結」(oneness)がすなわち理想の世界。弱音を吐いているのではありません。それは「単純明快」(simplicity)な世界への願望なのです。

俳句に出会うかなり前から、私はこの信念を人生の拠りどころとしていました。私の行動と信念の上に、俳句という名の王冠を戴いたのです。王冠が私の頭上に輝いたのは必然の結果と言えます。私の方から俳句の門を叩きました。俳句が向こうから勝手にやってきたのではありません。別な言い方をしましょう。俳句が人の人生を変えるのではありません。生き方を変えることによって俳句と出会えるのです。

では、「俳句と欧州の関係」について述べさせていただきます。もちろん俳句の母国は日本であります。日本なしには、俳句は存在しません。一昨年(2013年)11月、私は俳句国際化の拠点である“俳句の町”松山市を訪れ、偉大なる俳人・歌人正岡子規を記念して開設されている「子規記念博物館」を参観しました。うれしいことに、その数か月前に私の2冊目の『俳句集』が出版されました。原句はオランダ語ですが、著名な日本研究家で、日本を代表する俳聖・松尾芭蕉にも精通しているウィリー・ヴァンデワラ教授に日本語訳をお願いしました。

ところで、俳句は欧州を皮切りに世界を制覇しました。俳句そのものと、俳句の裏にある哲学は世界共通であります。クラシック音楽に象徴されるヨーロッパの文化に勝るとも劣らない俳句は、素晴らしい世界文化遺産です。俳句は今や世界の文化です。目には見えないが、俳句という名の文化は、間違いなく世界遺産の一部であります。人間

味に満ちた文化は世界の隅々まで浸透します。一国の文化は他国の文化を吸収しながら自国の思想体系（paradigm）を築いていきます。俳句はまさに日本と欧州の文化を結ぶ懸け橋です。私は俳句の外交官です。私は恵まれた職務を通じて、俳句の欧州での普及に貢献できたと思っています。私は俳句の広報担当者です。有難いことに、先日私は日本国外務大臣から「日EU俳句交流大使」を委嘱されました。私のこれまでの生涯は「外交官」でした。そして私は荣誉ある「俳句大使」の称号を与えられたのです。

俳句の詩的要素が世界的に評価されるようになった経緯には、私も少々貢献していると思っています。いずれ俳句はノーベル文学賞受賞の有力候補になるに違いありません。

ヨーロッパは戦争の灰燼かいじんから生まれたと言っても過言ではないでしょう。平和と和解への願いが欧州各国甦生いしずえの礎となったのです。ヨーロッパ諸国は、いまや戦争や紛争には絶対反対の立場にあります。ヨーロッパは調和の世界が訪れることを切望しています。俳句が欧州大陸でさらに広がる兆しが見られるのは、このような理由からでもあります。

政治家としての重責から開放された私は、従来にも増して俳句に熱中することができます。まさしく、「俳句一筋のハイク・ヘルマン・ファンロンパイ（Haiku-Herman）」が誕生したのです。繰り返になりますが、国際俳句交流協会が正しい道を歩いていることを立証し応援するために、私は今日ここに現れました。俳句は暇つぶしの趣味ではありません。俳句は人生そのものであり、人生の価値を具現化する表現手段であります。

さて私のスピーチは、私が最近詠んだ俳句の披露なしには終わるわけにはいきません。つい先日、わが家の庭に咲き誇る数々の花たちを眺めながら詠んだ俳句です。巡り来る季節を待って、花たちは必ず艶やかに咲き乱れ、人の目を楽しませてくれます。自然は、世の中がどんなに変動しても自分たちの役割を全うします。われわれ人間も、他の人々のために時宜を得た存在になれば、というのが私の夢です。

As each year flowers  
are on their rendezvous  
More faithful than men

花たちは毎年  
季節通りに咲き誇る  
人間よりきちんと  
〈年ごとに誠もて花出会いけり〉\*